

公共性における政治的なもの ——アーレントの視角から——

齋藤純一

この報告では、ハンナ・アーレントが公共性を「政治的なもの」の空間として描いたことの意味をあらためて考えてみたい。

周知のように、アーレントは、「政治的なもの」を「社会的なもの」に対置し、近代における後者の拡張から前者を救済しようとする議論を展開した。この議論に対しては、「政治的なもの」と「社会的なもの」、ビオスとゾーエーを不可分のものととらえる立場からの批判が可能であり、実際そのような批判が提起されてきた(J. アガンベンなど)。公共的なものと政治的なものとを等号で結ぼうとする彼女の議論が、生命(ゾーエー)に関わる事柄を政治的にとらえ返す視点を示しえていないことはたしかである(B. ホニグらが批判するように、彼女は私的なものを自然なものとして描くことによってそれを脱政治化してしまった)。

この報告で注目したいのは、アーレントが生命とその必要を公共的なもの=政治的なものから排除したのは、同一性/アイデンティティに準拠する共同性を反政治的なものとしてとらえる視点からであった、ということである。彼女にとって、「同一的なもの」は、近代社会における集合的な生命過程(集合的な生命を維持・増強しようとする統治)を指すだけではない。ドクサ(意見)の複数性を廃棄する真理観、自然(人間本性)や大文字の存在に依拠する形而上学的言説、全体主義の一義的な世界観、ユダヤ民族への愛(G. ショーレム)、エスニシティによって統合される国民国家、全員一致的な「世論」、正常とされるコードをなぞる思考や行動……。公共的なもの=政治的なものは、何であれ、「同一的なもの」に依拠し、それを再生産するようなあらゆる種類の思考や行動を退ける。

アーレントは、同一性/アイデンティティに準拠する共同性の構築に抗して人びとの生の「複数性」(plurality)を際立たせた。彼女の議論において、「複数性」は、たんなる多様性ではなく、一つひとつが互いに還元不可能なしかたで異なっていることを強調する言葉である。それは、人びとが世界に対してしめる位置の違いといういわば空間軸における差異のみならず、時間軸における差異化つまり、「新しい始まり」による世界の更新をも指している。「行為」(action)は、同一性/アイデンティティに準拠する共同性を攪乱する効果を宿すものとして位置づけられている。

もっとも、アーレントの議論は、「同一的なもの」(the identical)に「複数なもの」(the plural)を対置し、ある種のポストモダンの思想のように、既存の同一性/アイデンティティに対する攪乱を強調することに終始することはなかった。アーレントは、差異の享受が可能となる空間、互いに異なるものたちの間で相互の交渉が持続的に可能となる空間を公共的な空間として描いていった。言いかえれば、政治的なものをめぐる彼女の問いは、複数性("pluralization"としてのそれ)という条件のもとで、どのようにして人びとは互いの間に「共同性」を創出し、それを維持することができるかという問いによって方向づけられている。

端的に言えば、アーレントのいう公共性は、同一性によってではなく相互性によって媒介される「共同性」である。各人それぞれに現われるものが言葉において互いに交換されるかぎり、この「共同性」（共通世界のリアリティ）は人びとの間に形成されるのであり、パースペクティブの交換、意見の交換を離れたところに共同性が存在するわけではない。それぞれのパースペクティブが互いに還元不可能であるということをここで非共約性という言葉で表現するなら、非共約的なもの間の相互性がアーレントのいう公共的なもの=政治的なものの条件なのである。人びとは、互いに意見を交わすなかで自らのパースペクティブを脱-中心化していくが、その脱-中心化の動きが同一化(共同体化)に向かう動きとしてではなく、相互性を、したがって人びとの政治的な対等性を維持するような仕方で生じうるようにすること。アーレントが公共性を描く際に気を配ったのは何よりもこの点である。

本報告の関心は、アーレントの提起する複数性がなおもどのような共同性によって制約されているかを指摘することではなく(これはすでにアーレント批判の一つの典型である)、彼女が、同一性/アイデンティティに準拠しない「共同性」のあり方——すなわち政治的な公共性——をどのように描いたかを理解することにある。